



2007
平成19年

6

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市市民協働課へ

発行 ● 狛江市市民協働課
〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5
☎ 3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp
編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市和泉 3-2-16
プランツベルツ 201
☎ 3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

広がっていた稲穂の波 水田



千町耕地 昭和初め 多摩川に沿って広がる稲田の向こうに富士山が見える



田植え(駒井町) 1983年

● 写真中の数字は撮影された年

多摩川や野川が運んできた肥よくな土と豊かな水に恵まれた狛江では、古くから稲が作られ、初夏には田植えをする人々で田んぼはにぎわいを見せた。昭和初期には現在の市の面積の約6分の1にあたる約100haの水田があった。しかし30年代に入ると、宅地開発による埋め立てが進み、次々と姿を消すようになった。こ



れに用水の水量の減少や都市化による汚濁が加わり、さらに昭和42(1967)年の野川の改修や六郷用水の地下化、下水道整備などで農業用水の確保がさらに難しくなるとともに、45(1970)年のカドミウム汚染と国の減反政策によって急速に面積が減り、59(1984)年を最後に市内から水田が姿を消した。

清水川の水量減などで畑に転換 昭和59年に消えた狛江の水田

高橋弘(45歳)さんの話 昭和59年まで駒井保育園近く(駒井町)で田んぼ30aを作っていました。昔はウチの水田がたくさんあったと聞いてますが、清水川の水量が減り、昭和45年のカドミウム汚染と減反政策もあって、ほかは土地改良して畑に転換しました。ウチの祖父が米作りを続けると言っていて、昭和40年代中ごろに掘った井戸の水を使って、父の兄

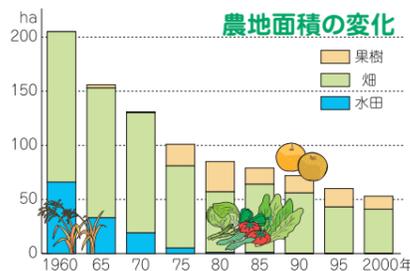


駒井町 1983年

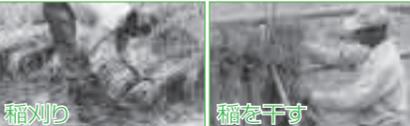
弟が手伝いに来て自家用の米を作っていました。田のまわりの道が2mくらいしかなくて、車が落ちたことが私が知ってるだけで3回ありましたね。小学生の時、市内の最後の水田ということで、自分の家の田んぼに見学に来たときは恥ずかしかったですね。米作りはあまり手伝わなかったけど、年末に田でとれた米でモチを25ウスもつので、その手伝いがたいへんでした。



最後の水田の跡にはモダンな住宅が建ち、「アメリカ村」と呼ばれた



1983年 収穫作業中にひと休み



稲刈り 稲を干す

おいしかった米の味 冷たかった根川の水

荒井久孝さん(79歳)の話 昭和41年に多摩川住宅ができるまで、そこから京王閣(調布市にあった遊園地)付近までずっと水田が広がっていて「千町耕地」と呼ばれてました。西和泉の田んぼは根川の水を使っていました。きれいな水だったけど、入っていると足が真っ赤になるくら

い冷たかったですね。ウチは染地(調布市)に田んぼが2反(約1,982㎡)あって、稲のほかに、裏作としてハダカムギを作ってたから、春は麦刈り、5月の節句ごろにタネをまき、6月に入って田植えと大忙しでした。1反で5、6俵できたけど、戦争中に供出したほかは、ほとんど自家用。おいしかったですよ。キャベツやナタネ、ハスを作っている家もあったけれど、9割は水田でした。



昭和7年ごろの農地

家族で元和泉の水田耕す 昭和30年代半ばから減少

井上城一(67歳)さんの話 父が中心になって家族で元和泉などにあつた田んぼで米を作っていました。昭和30年代の中ご



元和泉 1970年ごろ 西河原公園付近

ろに防衛庁のグラウンド(元和泉)ができるころ、多くの人々が田を手放しました。多摩川住宅ができるころから、水が減ったり、汚れたりしたので、付近の田んぼが次々と減り始め、ウチも田を畑に変えました。上の写真は、わたしが中学1年だった昭和27年に農作業をしているとき知り合いの写真館の人に頼まれて、家族総出でモデルになったものです。



千町耕地 昭和初め



2007年 千町耕地に広がる水田。耕作に使う牛が見える



千町耕地。右側の林との間を根川が流れている。白黒写真に人工着色が施してある

千町耕地に造られた多摩川住宅の二号棟(西和泉)



岩戸八幡神社付近

岩戸南 1970年



中和泉 昭和初め

くるりぼうを使って脱穀



中和泉 1952年

写真提供=久保和共さん(故・久保春洋さん撮影)、井上城一さん 資料=『狛江市の民俗IV』(狛江市教育委員会) 取材協力=高橋弘さん、荒井久孝さん、井上城一さん(順不同)